音読み漢字の特質

宮田アメリア・ルイサ

Ⅰ．漢字の音と訓

従来から漢字の3要素として「形・音・義」が認められている。「形」は漢字が視覚的に表わされた場合の文字の形、すなわち「字形」である。「音」は漢字が日本語の中で音声として表わされた発音である。そして「義」はその漢字が担っている意味である。

漢字の3要素「形・音・義」は一見明確に区別されている要素であるが、実際にはいろいろな問題がみられる。中国語で「音訓」という時は中国語の発音と意味のことである。ところが漢字が日本語にはいった時、中国語をまねた日本流の発音を「音」とし、その字の意味にあたる日本語の語形で、その字との結合が比較的固定しているものを「訓」と呼んでいる。日本では「形・音・義」の「音」は「音」と「訓」の二者で成り立っているのである。そのため、漢字の3要素のうち、「音」（その中の特に「訓」にあたる部分）と「義」の区別が明確でなくなってしまった。通時的にみた場合、漢字の中心的な意味は変化しなくとも、その読み方にはかなりの変遷がみられる。かつては「訓」として定着していたものが、現在では古風となり、文語的となると「訓」とは認められなくなる。「庫」という漢字に対して「コ」という音は現在でも使用されてくるが、「くら」という訓はもはや認められず、この漢字の意味とされている。換言すれば、「訓」とはその漢字の意味をあらわす語の中で、漢字との結合が比較的に固定しているものを指すのである。そしてその固定は程度の問題であるから、言語主体によってある語をその漢字の訓と認めるか否かで判断が異なる。そのような見解の違いを統一するため、国語審議会は常用漢字の字種を定めると同時に「常用漢字音訓表」も発表している。この音訓表では1945字の漢字一字一字に認められる「音」と「訓」を選定しているが、その基準は次の通りである。

①使用度や機能度（特に造語力）の高いものを取り上げる。なお使用分野の広さも参考にする。

②、③、④、⑤省略。

⑥異字同訓はなるべく避けるが、漢字の使い分けのできるもの及び漢字で書く習慣の強いものは取り上げる。

⑦いわゆる当て字や熟字訓のうち、慣用の広く久しいものは取り上げる。

（第十四期国語審議会報告の前文より）

その結果、審議会が認める訓は次のように整理されている。

愛：音	アイ	審：音	シン
訓	——	訓	——
拐：音	カイ	犠：音	ギ
訓	——	訓	——
聖：音	セイ	粋：音	スイ
訓	——	訓	——
宴：音	エン	逸：音	イツ
訓	——	訓	——

そのため、かなり固定して使用されてきた次のような語形も「訓」ではなく、意味となっている。

愛：いとしい・いつくしむ
審：つまびらか
拐：かどわかす
犠：いけにえ
聖：ひじり
粋：いき
宴：うたげ
逸：それる

このようにしてみると、訓と意味の境いには明確な一線がなく、主観的な判断にたよらざるを得ない。ある漢字に特定の訓を認めるかどうかは言語主体の言語環境、特に読書量に左右される。『高野聖』、『宴のあと』、『枠の構造』に触れたことがあるならば、迷うことなしに「聖・宴・粋」のそれぞれに訓を認めるであろう。

II．音のみの漢字

「山」「川」「木」など多くの漢字はその訓によって意味が支えられている。しかし訓だけが意味を表わしているのではない。漢字の音と訓では全く異なった意味を担っている場合もある。「運」は「荷物を運ぶ」と「運のつよい人」では意味がかなり違う。同様に、「親子の縁を結ぶ」と「川の縁」における「縁」、「額にケガをした」、「額にいれて飾る」と「多額のお金」における「額」ではそれぞれ意味に差がみられる。このような場合、音も意味を支えていると言うことができる。

「常用漢字表」のために選定された漢字は全部で1945字である。その中で、訓がなく音でしか使用されない漢字は「音訓表」によると 737 字、全体の37.8パーセン

トである。古風な訓、文語的な訓はこの表ではかなり整理されているから、この数値は比較的高いものだといえる。実際、異字同訓を避けるため、音しか認められなかった漢字がかなりある。

看：音カン
　　訓――（c･f･ みる→診る）
観：音カン
　　訓――（c･f･ みる→見る）
応：音オウ
　　訓――（c･f･ こたえる→答える）
棄：音キ
　　訓――（c･f･ すてる→捨てる）
験：音ケン・ゲン
　　訓――（c･f･ ためす→試す）

音しかない漢字の多くは意味を支える訓がないため、熟語の形で使用される。しかしこの728字のうち、いくつかは1字のまま自立して用いられる。それらを漢字を支えている意味によって分類すると次のようになる。

1．音がそのまま漢字の意味となっているもの。

林四郎（1980）は「漢字を使う際、多くの人の意識の底に存在するとおぼしいことば」を「漢字の基底語」と呼んでいる。たとえば「前」に対する「まえ」、「国」に対する「くに」、「城」に対する「しろ」などである。林の用法に従えば、音がそのまま意味となっている漢字とは「音が基底語となっている漢字」である。以下の50字は訓に置き替えることなくその意味が音によって担われている漢字である。

胃	銀	毒	幕	段
駅	刑	肉	票	愛
王	劇	脳	題	塾
恩	県	肺	銅	碁
害	席	鉢	鉄	紺
缶	栓	罰	銃	甲
菊	台	藩	絵	陸
客	茶	芸	券	膜
勘	塔	服	詩	象
菌	線	塀	礼	性

古くは「銭（ぜに）」、「筆（ふで）」、「馬（うま）」、「梅（うめ）」なども音であったと言われているが、現在ではいずれも訓として扱われている。

２．その漢字を含む熟語で意味が説明されるもの。

訓で置き替えることができず、しかも音だけでは意味がはっきりしないため、その漢字を使った熟語で意味が説明される漢字である。意味は熟語の形で説明されるが、１字で自立することができる漢字である。

党：政党　本来は「なかま、ふるさと」の意味もあるが自立して１字で使われる時は「党の方針」のように、「政党」を表わしている。

格：品格、格式　「格を下げる」など１字語としては「格式」の意味であるが、他に「格闘」「体格」「格子」などの熟語ではそれぞれ意味が異なる。なお、言語学の用語としては CASE の訳として使われる。

核：核心　「核」は物事の中心、重要な点を指すが、現在では「核の持ち込み」に代表されるように、「核兵器」を示すことが多い。

このように、漢字にはいろいろな意味があるが、１字で自立した場合、意味はかなり限定される。以下の漢字はその例である。

禅	禅宗・座禅	項	項目
賊	盗賊	才	才能
隊	軍隊・隊列	式	形式
獄	監獄	液	液体
籍	戸籍・学籍	職	職業
署	警察署	陣	陣地
税	税金	髄	骨髄
評	批評	能	能力
京	京都	福	幸福
義	義理	兵	兵隊
案	草案	魔	悪魔
域	地域・区域	脈	脈博・脈絡
功	成功	威	威厳
孝	孝行	質	（シツ）品質、（シチ）質草

３．別のことばや連語形式で意味が説明されるもの。

このグループに属する漢字はある１語でその意味を言い表すことはできても、その語がすなわち訓であるとは認められないもの、および１語では言い表せずに連語形式で意味を説明するものである。前者の例としては「医」の意味として「いやす」が挙げられるが、「いやす」に相当する漢字は現在「癒」で表わされている。後者の例としては「週」に対する「７日間の単位」が認められる。この他、以下のような例がこのグループに属している。

恋　おもい・こころ
韻　ひびき
策　はかりごと
師　かしら
姓　みょうじ
俗　ありふれていること
宅　すまい
堂　ざしき・建物
徳　正義・人格
念　おもい
班　くみ
役　つとめ
気　天地万有の根源

このように、音しかない漢字が表す意味には3段階の区別がみられる。

Ⅲ．音のみの漢字の自立

漢字は「表意文字」あるいは「表語文字」であると言われるように、漢字1字で表わされる言語単位は意味を担う最少の単位と一致する。しかし一方では、漢字の字源から離れ、現代では漢字本来の意味が薄れて、熟語となった場合にだけ意味が明らかになる漢字もある。「挨拶」はその代表例であるが、「挨」も「拶」も字義は「おしあうこと」である。そのため「挨拶」は「ひきしめあうこと」を表わしていたが、後には禅の世界では問答を通して教義を深めることを意味した。そして現在では形式的になった日常の問答を示すようになった。このような漢語は、それぞれの漢字の意味を取り出すことは現在では不可能になっている。

しかし数量的にみると、字義が不明な漢字は少数である。漢字がもつ大きな特徴のひとつである造語力という点からみると、意味不明の字は生産的ではない。大部分の漢字は意味を少しづつ変えながらいろいろな漢字と結合して熟語を作る。人の住む場所を表す「家」が「親族関係」、「職業」、「建物」、「人」等の意味で用いられて「家族・家庭・作家・画家・酒家」などの熟語を作る。また「良家、名家、旧家、貧家、富家、大家、豪家」など形容詞型の漢字と結合して1語となることも多い。

漢字が結合形のとして用いられることが多いことはいろいろな漢字調査にみられる。国立国語研究所が新聞を分析した調査（1976）によると、漢字が自立して一字

で使用される率は異なりで30.1パーセント、のべでは11.9パーセントにとどまっている。この数字は漢字の音訓両用を合計したものである。漢字の音読みの用法にしぼったら、自立形と結合形の差はさらに拡大する。のべ使用率では音で読まれた漢字が自立する割合は1.9パーセントなのである。異なり使用率でも自立する漢字は12.4パーセントであるから、音で読まれた漢字の大多数は結合要素として機能していることになる。

このように、自立する音で読まれた漢字は少ないものであるが、その中でも音でしか用いられない漢字がどのように自立するか以下で検討することにする。

自立する音でしか読まない漢字は大きく2つのグループに区別される。第1グループはその漢字1字に格助詞をつけることによって自由に用言と結びついて自立する漢字のグループである。そして第2グループは、用言や相言との結びつきにかなりの制限がみられる漢字のグループである。本章では第1グループの漢字を「自由形式」の漢字、第2グループのを「制限形式」の漢字と呼ぶことにする。

1．自由形式の漢字

このグループに属する漢字は第II章で述べた、音がそのまま意味となっている漢字である。これらの漢字は音が意味を担っているため、そのままの形で自立することができる。

自立するための条件とは次のようなものが考えられる。このグループに属する代表的な漢字10字「駅・菊・客・詩・席・肉・服・絵・塾・胃」を使って検討する。

a．格助詞の「が」「に」「を」「の」がつくこと。

駅　駅ができる　駅に向う　駅を建てなおす　駅の前

菊　菊が育つ　菊に水をやる　菊を植える　菊の花

客　客が来る　客に頼まれる　客をもてなす　客の靴

詩　詩が生まれる　詩に思いを託す　詩を書く　詩の朗読

席　席が空く　席に着く　席を探す　席の横

肉　肉が薄い　肉に脂肪がつく　肉を食べる　肉の焼き加減

服　服が似合う　服にボタンをつける　服を作る　服の飾り

絵　絵がうまい　絵になる　絵を鑑賞する　絵の才能

塾　塾が　塾に通う　塾を経営する　塾の先生

胃　胃が痛む　胃に悪い　胃を手術する　胃の検査

各種格助詞がつくことは漢字1字が名詞として自立することの最も重要な条件である。特に「が」をともなって主格に立つことはこのグループに属するすべての漢字にみられるが、その他に漢字の意味素性によっては「から」「へ」「と」などがつくこともある（「駅から3分」「席へ案内する」「菊と刀」「肉と野菜」）。

b．名詞文の述語部分になること。

駅　犯人が降りたのはこの駅だ。

菊　最も育てやすい秋の草花は菊だ。

客　代金を払わなかったのはあの客だ。

詩　「一握の砂」は啄木の詩だ。

席　ここは私の席だ。

肉　彼の好物は肉だ。

服　パーティーで最も気をつかうのは服だ。

絵　彼の趣味は絵だ。

塾　私が通ったのはこの塾だ。

胃　彼の弱いところは胃だ。

名詞文「AハBダ」の典型は「これは本だ」であるが、これに準じた用法が上の例である。

c．連体修飾語・修飾句が自由に結合すること。

駅　広い駅　みんなの駅　1日の利用者が10万人を越す駅

菊　白い菊　鉢植えの菊　温室で育てられた菊

客　丁寧な客　いつもの客　セブンスターを買った客

詩　明るい詩　中原中也の詩　母に捧げる詩

席　めでたい席　お祝いの席　彼のために設けた席

肉　やわらかい肉　ステーキ用の肉　よく焼けた肉

服　着やすい服　いつもの服　昨年買った服

絵　有名な絵　印象派の絵　日展に入賞した絵

塾　有名な塾　英語の塾　夫兄に信頼されている塾

胃　正常な胃　胃の病気　手術で半分になった胃

このように、第1グループの漢字は自由に自立することができる。音しか持たない漢字であるが、その音が訓に準じた働きをしている。現在では、これらの漢字のいくつかについてはその読み方が音であるという意識が薄れている。「常用漢字音訓表」でも「梅(うめ)」と「馬(うま)」は訓として認められているように、「菊(きく)」「肉(にく)」「絵(え)」「駅(えき)」なども中国語起源か曖昧になっている。これらの4漢字もその使用法からは将来訓とみなされる可能性がある。

漢字は1字で自立する用法の他に、造語要素として他の漢字と結合して熟語を作る用法もある。第1グループに属する漢字が実際の資料でどのくらい自立して用いられるかを示したのが表1である。これは国立国語研究所が行なった『現代新聞の漢字』(1976) をもとにして作成してあるが、同調査の特殊用法すなわち仮借、人名、

地名としての漢字の使用は除いてある。

表1　自立用法の割合

	自　立	結　合	計	自立の割合（%）
紺	13	3	16	81.2
愛*	198	245	443	44.6
絵	57	90	147	38.7
客	127	245	374	34.4
胃	60	128	188	31.9
詩	39	23	122	31.9
藩	11	28	39	28.2
礼	35	99	134	26.1
茶	40	118	158	25.3
同	11	43	54	20.3
幕	25	147	172	14.5
肉	38	230	268	14.1
王	31	227	258	12.0
銃	12	92	104	11.5
銀	74	594	668	11.0

*「愛」は動詞・「愛する」の自立用法を含む。

表1は自立用法が全体の10パーセントを越える漢字である。新聞という資料の性格上、各漢字の使用頻度数にはかなりのバラつきがみられる。頻度数が低い「「紺」「藩」などは自立用法の割合が高いが、他の漢字と一律に比較することはできない。しかし「絵」「客」「胃」「詩」は自立用法の割合が30パーセントを越え、しかも高頻度であらわれているため、この用法が安定しているといえる。この他、高頻度で自立用法がみられたのは「県」(92)、「線」(68)、「駅」(51)などであるが、これらの漢字は「○○県」「県人会」「県庁」「○○駅」「駅長」「駅員」「無線」「曲線」などのように熟語を作りやすく、自立用法としてはいずれも全体の使用頻度数の6～7パーセントと低くなっている。

2．制限形式の漢字

この第2のグループに属する漢字は第II章で、「熟語や他のことばで意味が説明される漢字」と述べたものである。

この「制限形式」の漢字はさらに二種類に下位分類される。第１種は形容詞、連体詞などの補足限定する成分をともなってはじめて自立する漢字である。そして第２種はその制限がさらに強まり、固定された成句や慣用句の中でしか自立しない漢字である。これら二種類の漢字は自立に際してかなり強い制約を受けるところが第１グループの「自由形式」の漢字と異なるところである。

ａ．補足限定成分をともなって自立する漢字。

これらの漢字は自立するためには「だれの」「どんな」「なにの」などの限定を必要とする。

「案」は「考え・計画」であるがそれだけでは自立せず、「誰々の案」、「この案」、「新しい案」などの形で助詞がついたり述語部分になったりする。同様に、「域」は「名人（専門家・玄人）の域に達した」、「関東地方の広い域」などの形で使用される。

「質が落ちた」のように、限定成分がない言い方も実際にはみられるが、その場合でも「（食堂の定食の）質」、「（あの店の商品の）質」など明文化されていない「何の質か」が陰されているのである。「党の方針」の場合も不特定の党ではなく「我が党」「○○党」のように、どの党であるか確定している時にのみ使用される。

ｂ．成句や慣用句の中でのみ自立する漢字。

成句や慣用句の一部となって自立する音読みの漢字はかなり多い。

念　念を入れる　念を押す　念が入る　念のため

気　気が置けない　気が済む　気が引ける　気が咎める　気にさわる　気を取り直す　気をのまれる　気を張る

意　意に介さない　意を汲む　意を尽くす　意を致す

能　能のない人　能ある鷹は爪を隠す

魔　魔の踏切　魔が差す

成句の一部となって自立している音読み漢字はある熟語の省略と意識されることが多い。それは慣用句と違って、成句やことわざは全体の句調を整えるためできるだけ短かく簡潔にしたり、同じことを表すのにも訓を避けて漢文調の音を用いるからである。

このように、制限形式の漢字の自立は文脈の制約を強く受ける。そのため、これらの漢字の自立は不安定で一時的な自立である。自由形式の漢字と異なり、音の意識は強く残っており、むしろある熟語の省略とみなされることがある。

Ⅳ．まとめ

訓がない、音のみの漢字の特質をいくつかみてきたが、以下を次のようにまとめることができる。

１．音しかない漢字も漢字１字だけで自立することができるが、自由に自立する漢字とかなりの制約を受けて自立する漢字の二種類の漢字がみられる。前者に属する漢字は音が意味を支えており、しかも自立度が高いため音は訓に準じた機能を果している。その結果、これらは音読みの漢字であるという意識は薄れつつあるといえる。

２．音でしか読まない漢字は意味がかなり固定している。複数の意味がある場合でも、漢字１字で自立する時はその意味が特定のものに限定される。「署」には、「役所」の意味のほかに「しるす」（署名）の意味もあるが、１字で自立する時は前者の意味に限られる。また「核の持ち込み」「核の脅威」の「核」は「核兵器」であるし、「籍」はもともと「ふみ・書きもの」（書籍）であったが、自立した１語では「戸籍」あるいは「学籍」の意味で用いられる。

このように音読みの漢字は１字で名詞として自立する際にいろいろな制限を受けることが明らかになった。なお、「する・ずる・じる」をつけて動詞として自立する用法がいくつかの漢字にみられる（案じ（ず）る、害する、毒する、念じ（ず）る、罰する、評する、題する等）が、動詞としての用法は本稿では言及しないことにする。

《参考文献》

池上貞造　「漢語の品詞性」　『国語国文』　1954－11
宮地裕　「現代漢語の語基について」　『語文』　31輯
国立国語研究所　『現代新聞の漢字』　秀英出版　1976
鈴木修次　『漢語と日本人』　みすず書房　1978
林四郎　「漢字基底考」　『文芸言語研究言語篇』5　1980

CARACTERISTICAS DE LOS KANJIS CON LECTURAS DEL "ON"

Los Kanjis, ideogramas de origen chino, tienen en Japón dos formas de leer: el "on," estilo chino, y el "kun," estilo japonés. El "on" es la pronunciación china adaptada a la fonología japonesa, y el "kun" es su traducción al Japonés. Muchos de los Kanjis tienen las dos formas de leer, mientras que otros poseen solamente una de las dos.

El presente articúlo analiza las caracteristicas de los Kanjis que poseen solamente la lectura del "on" según la'Nómina de kanjis de uso diario' (JOYO KANJI-HYO).

De los 737 kanjis que poseen solamente la lectura del "on," 96 son los kanjis que tienen uso independiente como sustantivo, mientras que los restantes necesitan combinarse con otros kanjis para integrarse en la oración. Estos 96 kanjis se dividen en dos grupos de acuerdo a su uso: kanjis de uso libre y kanjis de uso restringido. Los kanjis de uso libre son aquellos cuyos "on" son aceptados en el japonés contemporáneo de la misma manera que los "kun," ya sea acompañados de partículas y modificadores varios, o actuanco como núcleo del predicado de oraciones nominales. Los kanjis de uso restringido son aquellos que necesitan ciertas condiciones, tales como la presencia de ciertos modificadores o formar parte de expresiones idiomáticas,para covertirse en sustantivo y formar parte de la oración.